

35.C14593

PATENT APPLICATION

IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In re Application of:

YASUO SUDA

Application No.: 09/604,744

Filed: June 28, 2000

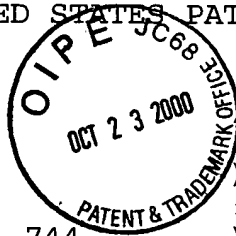
For: IMAGE PICKUP APPARATUS

Examiner: Not Assigned

Group Art Unit: 2712

October 23, 2000
(Monday)

Box Missing Parts
Commissioner for Patents
Washington, D.C. 20231



CLAIM TO PRIORITY

Sir:

Applicant hereby claims priority under the International Convention and all rights to which he is entitled under 35 U.S.C. § 119 based upon the following Japanese Priority Application:

JAPAN

11-185660

June 30, 1999.

A certified copy of the priority document is enclosed.

Applicant's undersigned attorney may be reached in our Washington, D.C. office by telephone at (202) 530-1010. All correspondence should continue to be directed to our address given below.

Respectfully submitted,


Attorney for Applicant

Registration No. 31,588

FITZPATRICK, CELLA, HARPER & SCINTO
30 Rockefeller Plaza
New York, New York 10112-3801
Facsimile: (212) 218-2200

RPB\cmv

7

日本国特許庁
PATENT OFFICE
JAPANESE GOVERNMENT

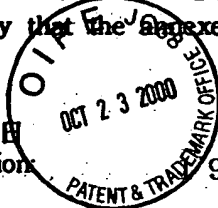
CF01459305
09/604,741
YASHO SUDA
6-28-00

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office.

出願年月日

Date of Application



999年 6月30日

出願番号

Application Number:

平成11年特許願第185660号

出願人

Applicant (s):

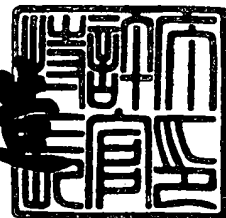
キヤノン株式会社

CERTIFIED COPY OF
PRIORITY DOCUMENT

2000年 7月21日

特許庁長官
Commissioner,
Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2000-3057054

【書類名】 特許願

【整理番号】 4003003

【提出日】 平成11年 6月30日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 H04N 5/335

【発明の名称】 撮像装置

【請求項の数】 14

【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社
社内

【氏名】 須田 康夫

【特許出願人】

【識別番号】 000001007

【氏名又は名称】 キヤノン株式会社

【代表者】 御手洗 富士夫

【代理人】

【識別番号】 100065385

【弁理士】

【氏名又は名称】 山下 穰平

【電話番号】 03-3431-1831

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 010700

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9703871

【ブルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 撮像装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 複数の撮像領域と、

一つの撮像領域と、前記一つの撮像領域に隣接する他の撮像領域に跨るように被写体の像を投影する結像手段と、

前記結像手段から入力した前記被写体からの像信号が前記他の撮像領域で光電変換されることを抑制する抑制手段とを有することを特徴とする撮像装置。

【請求項 2】 請求項 1 に記載の撮像装置において、前記複数の撮像領域のそれぞれから得られた選択的光電変換出力に基づいてカラー画像を形成する画像処理手段を有することを特徴とする撮像装置。

【請求項 3】 請求項 1 又は請求項 2 に記載の撮像装置において、前記結像手段は複数の結像手段を有することを特徴とする撮像装置。

【請求項 4】 請求項 3 に記載の撮像装置において、前記複数の結像手段はスペクトル分布の異なる複数の画像を形成することを特徴とする撮像装置。

【請求項 5】 請求項 3 に記載の撮像装置において、前記抑制手段は、前記複数の結像手段にそれぞれ配された波長帯域の異なる複数の第 1 の色フィルターと、前記撮像領域にそれぞれ配された、該第 1 の色フィルターと同じ波長帯域の複数の第 2 の色フィルターとからなることを特徴とする撮像装置。

【請求項 6】 請求項 5 に記載の撮像装置において、前記第 1 及び第 2 の色フィルターは、赤（R）色フィルター、緑（G）色フィルター、及び青（B）色フィルターからなることを特徴とする撮像装置。

【請求項 7】 請求項 3 に記載の撮像装置において、前記抑制手段は、前記複数の結像手段の各々に対応して配された、隣接する結像手段について偏光方向が異なる複数の第 1 の偏光手段と、前記撮像領域に対応して配された、該第 1 の偏光手段と偏光方向が同じ複数の第 2 の偏光手段とからなることを特徴とする撮像装置。

【請求項 8】 請求項 7 に記載の撮像装置において、前記複数の第 1 及び第 2 の偏光手段は、隣接する偏光手段の偏光方向が互いに直角であることを特徴と

する撮像装置。

【請求項 9】 請求項 7 又は請求項 8 に記載の撮像装置において、前記結像手段の光入射側又は前記撮像領域の光入射側に複数の色フィルターを配したことを特徴とする撮像装置。

【請求項 10】 請求項 1 ～ 9 のいずれかの撮像装置において、前記結像手段はフォトリソグラフィックガラスであることを特徴とする撮像装置。

【請求項 11】 請求項 1 ～ 9 のいずれかの請求項において、前記抑制手段は色純度補正フィルターを構成することを特徴とする撮像装置。

【請求項 12】 請求項 9 に記載の撮像装置において、前記複数の色フィルターは、赤（R）色フィルター、緑（G）色フィルター、及び青（B）色フィルターであることを特徴とする撮像装置。

【請求項 13】 請求項 9 に記載の撮像装置において、前記複数の色フィルターは、シアン、マゼンダ、イエローの補色光学フィルターであることを特徴とする撮像装置。

【請求項 14】 請求項 3 に記載の撮像装置において、前記抑制手段は、複数の撮像領域の画素毎のマイクロレンズであり、前記マイクロレンズは、各画素の受光部が主に前記複数の結像手段のうちの一つの結像手段からの射出した光束を捉えるように前記受光部に対して偏心していることを特徴とする撮像装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は撮像装置に係わり、特にデジタルカラーカメラの撮像装置に好適に用いることができる撮像装置に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

デジタルカラーカメラでは、リリースボタンの押下に応動して、CCDやCMOSセンサなどの固体撮像素子に被写界像を所望の時間露光し、これより得られた一つの画面の静止画像を表わす画像信号をデジタル信号に変換して、YC処理などの所定の処理を施して、所定の形式の画像信号を得る。撮像された画像を表わすデジ

タルの画像信号は、それぞれの画像毎に、半導体メモリに記録される。記録された画像信号は、随時読み出されて表示または印刷可能な信号に再生され、モニターなどに出力されて表示される。

【 0 0 0 3 】

デジタルカラーカメラを薄型化するための技術の一つとして、特開平10-145802号公報の開示例がある。特開平10-145802号公報では撮影画面を複数の領域に分割し、領域毎に結像光学系を設けて物体の部分画像を形成している。このとき、一つの結像光学系に対して一つの物体像が形成されて、撮影画面を分割した数に相当する物体像が単一の撮像素子上に投影される。そして、視野制限バッフルと呼ばれる物体像分離壁を設けている。視野制限バッフルは結像光学系と撮像素子の間に配置され、隣接する結像光学系からの光の漏れ込みを防ぐ壁の役割をするものである。

【 0 0 0 4 】

【発明が解決しようとする課題】

視野制限バッフルは撮像領域の隔壁であるために、撮像領域を細分化するほど多くの面積を必要とし、これは撮像素子を小型化することに対して障害となる。撮像素子全体の面積を大きくすることは生産歩留まりを極端に下げ、コスト上の制約から撮像素子の大きさには事実上の上限がある。

【 0 0 0 5 】

本発明に係る第1の目的は、物体像分離壁を必要とせず、小型の撮像素子を使用した薄型デジタルカラーカメラを提供することである。

【 0 0 0 6 】

本発明に係る第2の目的は、色純度の高い画像を得るに好適な構成で第1の目的を実現することである。

【 0 0 0 7 】

本発明に係る第3の目的は、色分解のための光学フィルターを制約しない構成で第1の目的を実現することである。

【 0 0 0 8 】

【課題を解決するための手段および作用】

本発明の撮像装置は、複数の撮像領域と、

一つの撮像領域と、前記一つの撮像領域に隣接する他の撮像領域に跨るように被写体の像を投影する結像手段と、

前記結像手段から入力した前記被写体からの像信号が前記他の撮像領域で光電変換されることを抑制する抑制手段とを有するように構成することにより、物体像分離壁を必要とせず、小型の撮像素子を使用した薄型のデジタルカラーカメラ用撮像装置を実現するものである。

【0009】

前記抑制手段としては、例えば、複数の結像手段にそれぞれ配された波長帯域の異なる複数の第1の色フィルターと、撮像領域にそれぞれ配された、該第1の色フィルターと同じ波長帯域の複数の第2の色フィルターとからなるもの、複数の結像手段の各々に対応して配された、隣接する結像手段について偏光方向が異なる複数の第1の偏光手段と、撮像領域に対応して配された、該第1の偏光手段と偏光方向が同じ複数の第2の偏光手段とからなるもの、撮像領域に設けた偏心マイクロレンズからなるものを用いることができる。

【0010】

前記第1及び第2の色フィルターとしては、赤（R）色フィルター、緑（G）色フィルター、及び青（B）色フィルターを用いることができる。

【0011】

前記複数の第1及び第2の偏光手段としては、隣接する偏光手段の偏光方向が互いに直角であるものを用いることができる。

【0012】

前記抑制手段として、第1及び第2の偏光手段を用いるものについては、前記結像手段の光入射側又は前記撮像領域の光入射側に複数の色フィルター（例えば、赤（R）色、緑（G）色、及び青（B）色フィルター、又はシアン、マゼンダ、イエローの補色光学フィルター）を配することができる。

【0013】

前記結像手段としてはフォトリソミックガラス、前記抑制手段としては色純度補正フィルターとして機能するものを用いることができる。

【0 0 1 4】

【実施例】

以下、本発明の実施例について図面を用いて詳細に説明する。

(第 1 の実施例)

図 1 7 (a)、(b)、(c) は本発明によるデジタルカラーカメラの全体構成を表す図である。図 1 7 (a) は正面図、図 1 7 (c) は裏面図、図 1 7 (b) は図 1 7 (c) の裏面図に示した矢印 A の位置での断面図である。

【0 0 1 5】

図 1 7 (a)、(b)、(c) において、1 はカメラ本体、2 はカラー液晶モニタ 4 の背後に位置し、白色拡散板よりなる照明光取り込み窓である。5 はメインスイッチ、6 はリリース釦、7, 8, 9 は使用者がカメラの状態をセットするためのスイッチで、特に 9 は再生ボタン、13 は撮影可能な残り枚数の表示である。11 はファインダー接眼窓であって、ファインダー前枠 3 からプリズム 12 に入射した物体光がここから射出する。10 は撮像素子、14 は外部のコンピュータ等に接続して、データの送受信をするための接続端子である。

【0 0 1 6】

信号処理系の概略構成を説明する。図 1 4 は、信号処理系のブロック図である。本カメラは、CCD あるいは CMOS センサなどの固体撮像素子 120 を用いた単板式のデジタルカラーカメラであり、固体撮像素子 120 を連続的または単発的に駆動して動画像または静止画像を表わす画像信号を得る。ここで、固体撮像素子 120 は、露光した光を各画素毎に電気信号に変換してその光量に応じた電荷をそれぞれ蓄積し、その電荷を読み出すタイプの撮像デバイスである。

【0 0 1 7】

なお、図 1 4 には本発明に直接関係ある部分のみが示されており、本発明に直接関係ない部分は図示とその説明を省略している。

【0 0 1 8】

図 1 4 に示すように、撮像装置は、撮像素子 10 と、画像処理手段であるところの画像処理系 20 と、記録再生系 30 と、制御系 40 とを有する。さらに、撮像素子 10 は、撮影レンズ 100、絞り 110 および固体撮像素子 120 を含み、画像処理系 20 は、A/D

変換器500、RGB画像処理回路210 およびYC処理回路230を含み、記録再生系30は、記録処理回路300および再生処理回路310を含み、制御系40は、システム制御部400、操作検出部410および固体撮像素子の駆動回路420を含む。

【0019】

撮像系10は、物体からの光を絞り110と撮影レンズ100を介して固体撮像素子120の撮像面に結像する光学処理系であり、撮影レンズの光透過率を調節して、適切な光量の被写体像を固体撮像素子120に露光する。前述のように、固体撮像素子120は、CCDやCMOSセンサなどの撮像デバイスが適用され、固体撮像素子120の露光時間および露光間隔を制御することにより、連続した動画像を表わす画像信号、または一回の露光による静止画像を表わす画像信号を得ることができる。

【0020】

図1は撮像系10の詳細図である。まず、絞り110は図3に示すような3つの円形開口110a、110b、110cを有し、この各々から撮影レンズ100の光入射面100eに入射した物体光は、撮影レンズ100の3つのレンズ部100a、100b、100cから射出して固体撮像素子120の撮像面上に3つの物体像を形成する。絞り110と光入射面100eおよび固体撮像素子120の撮像面は平行に配置されている。このように、入射側のパワーを弱く、射出側のパワーを強くし、入射側に絞りを設けることで、像面の湾曲を少なくすることができる。なお、ここでは、撮影レンズ100の光入射面100eを平面としたが、3つの球面あるいは3つの回転対称非球面で構成しても良い。

【0021】

3つのレンズ部100a、100b、100cは、撮影レンズ100を光射出側から見た図5に示すように円径の球面部を持ち、この球面部には670nm以上の波長域について低い透過率を持たせた赤外線カットフィルターが、また、ハッチングをかけて示した平面部100dには遮光性膜が形成されている。すなわち、撮影光学系は撮影レンズ100と絞り110より成り、3つのレンズ部100a、100b、100cのそれぞれが結像系である。

【0022】

撮影レンズ100をガラス製とする場合にはガラスモールド製法、樹脂製とする

場合には射出成形を用いると製作上容易である。

【0023】

図2は固体撮像素子120の正面図で、形成される3つの物体像に対応させて3つの撮像領域120a、120b、120cを備えている。撮像領域120a、120b、120cの各々は、縦横のピッチが $2.8\mu\text{m}$ の画素を 800×600 個配列してなる $2.24\text{mm}\times 1.68\text{mm}$ の領域であって、撮像領域全体の寸法は $2.24\text{mm}\times 5.04\text{mm}$ 、また、各撮像領域の対角寸法は 2.80mm となる。図において、51a、51b、51cは内部に物体像が形成されるイメージサークルである。イメージサークル51a、51b、51cは絞りの開口と撮影レンズ100の射出側球面部の大きさで決定される円形であり、イメージサークル51aと51b、および、イメージサークル51bと51cには互いに重なり合う部分が生じる。

【0024】

図1において、絞り110と撮影レンズ100に挟まれた領域のハッチングで示した部分52a、52b、52cは撮影レンズ100の光入射面100e上に形成された光学フィルターである。光学フィルター52a、52b、52cは撮影レンズ100を光入射側から見た図4で示すように、絞り開口110a、110b、110cを完全に含む範囲に形成されている。

【0025】

光学フィルター52aは図6にGで示した主に緑色を透過する分光透過率特性を有し、光学フィルター52bはRで示した主に赤色を透過する分光透過率特性を有し、さらに、光学フィルター52cはBで示した主に青色を透過する分光透過率特性を有している。すなわち、これらは原色フィルターである。レンズ部100a、100b、100cに形成されている赤外線カットフィルターの特性との積として、イメージサークル51aに形成されている物体像は緑色光成分、イメージサークル51bに形成されている物体像は赤色光成分、イメージサークル51cに形成されている物体像は青色光成分によるものとなる。

【0026】

一方、固体撮像素子120の3つの撮像領域120a、120b、120c上にもまた光学フィルター53a、53b、53cが形成され、これらの分光透過率特性もまた図6に示したものと同等である。つまり、撮像領域120aは緑色光(G)に対して、撮像領域120

bは赤色光 (R) に対して、撮像領域120cは青色光 (B) に対して感度を持つ。

【0027】

各撮像領域の受光スペクトル分布は瞳と撮像領域の分光透過率の積として与えられるため、瞳と撮像領域の組み合わせは波長域によって選択される。つまり、絞りの開口110aを通過した物体光は主に撮像領域120aで光電変換され、絞りの開口110bを通過した物体光は主に撮像領域120bで光電変換され、さらに、絞りの開口110cを通過した物体光は主に撮像領域120cで光電変換される。すなわち、撮像領域120aはG画像を、撮像領域120bはR画像を、撮像領域120cはB画像を出力することになる。このように、撮像光学系の瞳と撮像素子に色分解のための光学フィルターを多重に使用すると、色純度を高めることができる。これは、同種の光学フィルターを2回通すと、透過特性が鋭く立ち上がるようになって赤色 (R) と青色 (B) のオーバーラップが無くなるためである。なお、各撮像領域での信号レベルが同一の蓄積時間でそれぞれ適切になるように、光学フィルター52a、52b、52cあるいは光学フィルター53a、53b、53cの透過率を設定すると良い。

【0028】

画像処理系20は、固体撮像素子120の複数の撮像領域が、各々、前記複数の画像の一つから得た選択的光電変換出力に基づいてカラー画像を形成する。この際、比視感度のピーク波長は555nmであるので、この波長を含むG画像信号を基準画像信号として信号処理を行う。

【0029】

固体撮像素子の画素ピッチを固定して考えると、固体撮像素子上に例えば 2×2 画素を一組としたRGBカラーフィルターを形成して画素の一つ一つに波長選択性を付与し、これによって物体像をRGBの各画像に分離する一般のデジタルカラーカメラに採用されている方式に比較して、物体像の大きさが $1/\sqrt{3}$ になり、これに伴って撮影レンズの焦点距離はおおよそ $1/\sqrt{3}$ となる。したがって、カメラの薄型化に対して極めて有利である。

【0030】

なお、光学フィルター52a、52b、52cと、光学フィルター53a、53b、53cの分光透過率特性は、図6に示したように、RとBはほぼ分離されているものの、RとGお

よびGとBは互いにオーバーラップしている。

【0031】

したがって、赤色光のイメージサークル51bが青色光を光電変換する撮像領域120cにかかっているにもかかわらず、逆に、青色光のイメージサークル51cが赤色光を光電変換する撮像領域120bにかかっているにもかかわらず、これらの画像が撮像領域の出力となることはない。ところが、赤色光のイメージサークル51bが緑色光を光電変換する撮像領域120aにかかっている部分と、緑色光のイメージサークル51aが赤色光を光電変換する撮像領域120bにかかっている部分では、本来遮断すべき異なる波長の画像が僅かではあるが重畳してしまう。つまり、物体像の選択性は光学フィルター52aと光学フィルター53bの分光透過率特性の積と、光学フィルター52bと光学フィルター53aの分光透過率特性の積で与えられるため、R画像信号とG画像信号のクロストークは小さいものの、完全にはゼロにならない。

【0032】

そこで、撮影レンズ100にはRとGのオーバーラップ部の波長域の透過率を低下させる特性をさらに持たせてある。これは色純度補正フィルタと呼ばれる光学フィルター技術を用いればよい。

【0033】

この色純度補正フィルタは、透明合成樹脂またはガラスから成る母材中に希土類の金属イオンを所定量含有させた光学フィルターである。

【0034】

希土類の金属イオンとしては、ネオジウムイオン、プラセオジウムイオン、エルビウムイオン、ホルミウムイオン等の1種または2種以上が挙げられるが、少なくとも、ネオジウムイオンを必須イオンとして使用するのが好ましい。なお、これらのイオンとしては、通常3価のイオンが使用される。そして、金属イオンの含有量は、撮影レンズ100の母材の100質量部に対し、通常0.01～40質量部、好ましくは0.04～30質量部の範囲から選択される。

【0035】

図7に示すように、色純度補正フィルタは、RGBの各色成分のうちピーク波長間の所定波長範囲の光を選択的に吸収してその透過量を低減する特性を有する。

この作用によって、赤色光のイメージサークル51bが緑色光を光電変換する撮像領域120aにかかること、それから、緑色光のイメージサークル51aが赤色光を光電変換する撮像領域120bにかかることによるクロストークはほとんど生じなくなる。

【0036】

さらに、撮影レンズ100には光により暗化し、光の照射をやめると可逆的に無色状態にもどる現象であるフォトクロミック特性を併せ持たせる。これは、固体撮像素子120の蓄積時間制御範囲が限られていることから、極めて被写界が明るい場合に固体撮像素子に到達する光量を抑え、撮影可能な輝度範囲を拡大するためである。

【0037】

フォトクロミックガラスとしては、例えば、眼鏡用として実用化されているチャンスーピルキントン社製のリン酸塩系のフォトクロミックガラス（商品名：Reactolite Rapide）を用いるとよい。

【0038】

図8は、撮影レンズ100に用いたフォトクロミックガラスの分光透過率特性を示す図であり、図8において実線が太陽光を20分照射した後の特性であり、破線が未照射の場合の特性を示したものである。晴天時の屋外等でカメラを持ち歩くと、絞り110から撮影レンズ100に入射した光束によって撮影レンズ100そのものが暗化し、固体撮像素子120に入射する光量を約1/2に抑えることができる。この結果、蓄積時間を2倍に伸ばすことが可能であって、高輝度側の制御限界を引き上げることになる。

【0039】

各撮像領域120a、120b、120cの画面サイズは、前述のように画素ピッチ $2.8\mu\text{m}$ 、画素数 800×600 より、 $2.24\text{mm}\times 1.68\text{mm}$ であって、画面の対角寸法は 2.80mm となる。一般に、小型カメラの撮影画角 θ は対角方向に 70° 程度とするのが最も使いやすい。撮影画角を 70° とすると、画面の対角寸法から焦点距離が決定され、この場合は 2.0mm となる。

【0040】

人物等を撮影対象とする場合は、ヒトの身長が170cm前後であることや、1から3人を一緒に写すことが多いことを根拠として、仮想被写体距離 D [m] を撮影画角 θ [°] の関数として式 (1) のように定義することができる。

【0 0 4 1】

【数 1】

$$D = \frac{14}{\tan \frac{\theta}{2}} \quad \dots\dots\dots (1)$$

式 (1) の θ に70° を代入すると、 $D=2.0$ mを得る。そこで、被写体距離2mの時に最良のピントを結ぶように撮像系10を構成するとすれば、無限遠位置からのレンズの繰り出しは0.002mmであり、後述する許容錯乱円径との関係からレンズ繰り出し機構のない固定焦点撮像光学系としても実用上全く問題はない。

【0 0 4 2】

また、空気中に置かれた平凸レンズの焦点距離 f は、屈折率を n 、球面の半径を r として、

【0 0 4 3】

【数 2】

$$f = \frac{1}{1-n} r \quad \dots\dots\dots (2)$$

で表すことができる。したがって、仮に、撮影レンズ100の屈折率 n を1.5とすれば、2.0mmの焦点距離を得る r は1.0mmとなる。

【0 0 4 4】

赤色、緑色、青色の各物体像について、像の大きさを揃えておくこと後の信号処理で像倍率補正を行う必要がないので処理時間を伸ばすことがなく都合がよい。このため、RGB光学フィルターの透過光のピーク波長530nm、620nm、450nmについてレンズ部100a、100b、100cを最適化し、各像倍率を一定に設定する。これは各レンズ部の主点位置から固体撮像素子までの距離を一律にすることで、近軸的には実現できる。

【 0 0 4 5 】

d線 (587.6nm) の屈折率 $n_d=1.5$ 、アッペ数 $\nu_d=60$ のガラスの場合、波長530nm、620nm、450nmにおける屈折率は、それぞれ1.503、1.499、1.509程度である。仮に、レンズ部100a、100b、100cの球面の半径 r が均一に-1.0mmとすると、これらの波長における焦点距離は式 (2) により次のようになる。

【 0 0 4 6 】

レンズ部100a 代表波長530nm： 1.988mm

レンズ部100b 代表波長620nm： 2.004mm

レンズ部100c 代表波長450nm： 1.965mm

画素ピッチから許容錯乱円径を $3.0\mu\text{m}$ とし、さらに、撮影レンズのFナンバーをF5.6と仮定すれば、これらの積で表される焦点深度は $16.8\mu\text{m}$ となり、620nmと450nmの焦点距離の差0.039mmはすでにこれを越えていることが分かる。すなわち、近軸的な像倍率だけはそろっているが、被写体の色によってはピントが合わない。通常、物体の分光反射率は、広い波長域にまたがっているので、一般にシャープなピントが得られることは極めて稀である。

【 0 0 4 7 】

そこで、レンズ部100a、100b、100cの球面の半径 r を各代表波長毎に最適化する。すなわち、ここでは可視域全体の色収差を除去する色消しを行わず、レンズ毎に波長別の設計を適用する。まず、式 (2) を変形して、式 (3) を得る。

【 0 0 4 8 】

【数 3】

$$r = (1 - n)f \quad \dots\dots\dots (3)$$

式 (3) に $f=2.0$ と順次 $n=1.503$ 、 $n=1.499$ 、 $n=1.509$ を代入し、各半径を算出すると、次のようになる。

【 0 0 4 9 】

レンズ部100a 代表波長530nm： $r=-1.006\text{mm}$

レンズ部100b 代表波長620nm： $r=-0.998\text{mm}$

レンズ部100c 代表波長450nm: $r = -1.018\text{mm}$

像高の高い位置での像倍率差のバランスを取るために、レンズ部100a、100b、100cの頂点高さを僅かに調整すれば、シャープネスと像倍率の両者に関して理想的な形態となる。さらには、各レンズ部に非球面を用いて、像面湾曲を良好に補正する。像の歪曲については後の信号処理で補正すればよい。

【0050】

このように、視感度が最も高い緑色555nmの波長を含む物体光による基準G画像信号と、赤色と青色の物体光による画像信号とをそれぞれ得て、結像系に単一の波長については異なる焦点距離を、各スペクトル分布の代表波長については略同一の焦点距離を設定すれば、これらの画像信号を合成することにより良好に色収差の補正されたカラー画像を得ることができる。各結像系は1枚構成であるので、撮像系を薄型化する効果もある。また、通常、色消しは分散の異なる2枚のレンズの組み合わせが必要であるのに対し、1枚構成であることによるコストダウンの効果もある。

【0051】

撮影レンズ100には画素ピッチと同レベルまでの高い空間周波数帯域まで高コントラストの解像が求められる。撮像系10は波長域別の3つの物体像を取り込むことから、バイヤー配列等のモザイク状光学フィルターを備えた同一画素数の撮像系と比較したとき、前述のように約 $1/\sqrt{3}$ の焦点距離で同じ撮影画角となる。したがって、より高い空間周波数成分の高コントラストな解像を実現しなくてはならない。前述した各レンズ部の波長別最適化はこのための色収差抑制技術である。

【0052】

一般に、撮影光学系の収差特性を改善して偽解像を生じ難くし、問題を軽減する方法には、①構成レンズの枚数を増やす、非球面化する、異常分散ガラスを用いる、回折光学素子を複合的に用いる、といった幾つかの手法を用いて設計自由度を増す、②結像光束を絞る、という2通りがある。

【0053】

上記①の設計自由度を増やす方向性は、焦点距離が $1/\sqrt{3}$ になったにもかかわ

らず撮影光学系の構成を複雑化することになって、撮影装置の薄型化に逆行することになるので適切でない。一方、上記②の細い光束を用いる方向性は薄型の撮影装置との整合性が良い。

【 0 0 5 4 】

結像光束を絞ると、OTFと呼ばれるレスポンス関数は図 1 0 の実線 (b) で示すように低周波成分において緩やかに単調減少し、その後僅かに負の値をとったあと再び僅かに正の値をとる特性となる。一方、結像光束を絞らずに太い光束を用いる場合は図 1 0 の波線 (a) で示すように低周波成分において急速に減少したあと、いったん負の値をとり、また正の値をとる特性となる。

【 0 0 5 5 】

OTFが負の値をとる状態が偽解像の発生を表し、実際の画像では白い部分が黒くなり反対に黒い部分が白くなる、ネガポジ反転現象が発生している状態に相当する。したがって、結像光束を絞った方が自然な画像が得られることが分かる。

【 0 0 5 6 】

ところが、極端に光束を絞り込むと、今度は光の回折の影響によって逆に高周波域のコントラストの低下が発生する。このような状況では、点像は中心の輝点とその周りを何重かに取り囲む回折縞とで構成されている。この原因はよく知られているように、絞り開口の縁から発する周辺波による回折縞の強度が相対的に増すためである。

【 0 0 5 7 】

回折縞を減らすには、中央部が透明で周辺に行くにしたがって濃度が大きくなるフィルターを撮影レンズに付加すればよい。この手法はアポダイゼーションと呼ばれ、光学技術ハンドブック増補版（昭和50年、朝倉書店）の172ページから174ページに詳しく述べられている。

【 0 0 5 8 】

図 9 は撮影レンズ100の光入射面100e上であって、絞り開口110a、110b、110cに対向する位置に設けた透過率分布型フィルターの透過率分布を表す図である。透過率分布型フィルターは図 1 の54a、54b、54cで示され、透過率が最も高い位置は絞り開口110a、110b、110cの中心に一致し、透過率がゼロになる位置は絞り

開口110a、110b、110cの縁に一致させてある。すなわち、透過率分布は絞りの中心で最も高く、中心から離れるほど単調に減少する。

【0059】

透過率分布型フィルターは撮影レンズ100の光入射側に、インコネル、クロメル、クローム等の薄膜を蒸着またはスパッタリングすることによって形成する。薄膜の厚さを中央部が最も薄く、周辺部が最も厚くなるようにすることによって、図9に示した特性を得ることが可能である。なお、こういった薄膜の形成には蒸着またはスパッタリング過程における遮蔽物の位置制御を連続的に行う。

【0060】

ここでは、透過率分布型フィルター54a、54b、54cを撮影レンズ上に形成したが、ガラス板上に形成して、撮影レンズ100の光入射側、あるいは光射出側に配置する構成であってもよい。

【0061】

図11は点像の輝度分布を示す図である。図において波線(a)は絞り開口の透過率が一定の場合、実線(b)は絞り開口の透過率を中心から周辺にかけて低下させた場合である。(a)の特性に対し(b)の特性は点像の裾部分での跳ね返りが無く、明らかに良好な画像となっていることを示している。これが、アポダイゼーションで周辺光束を減ずることによる回折縞低減効果の現れである。

【0062】

次に、撮影レンズと撮像領域の位置関係について述べる。撮像系は3つのレンズ部を有するために、被写体距離に応じて3つの物体像の位置が相対的に変化する。前述のように各撮像領域は $2.24\text{mm} \times 1.68\text{mm}$ であって、これらは長辺を接するように隣接して配置されている。したがって、隣り合う撮像領域の中心間隔は 1.68mm である。後述するYC処理回路230では、物体像の中心と撮像領域の中心が一致しているものとして信号処理を行う。仮想被写体距離 2m にある物体像をこれと同じ間隔で撮像部上に形成するとすれば、図12に示すように撮影レンズ100のレンズ部100a、100b、100cの間隔を 1.6783mm に設定することになる。図において矢印55a、55b、55cは、撮影レンズ100の3つのレンズ部100a、100b、100cによる正のパワーを有する結像系を表す記号、矩形56a、56b、56cは撮像領域120a、120

b、120cの範囲を表す記号、L1、L2、L3は結像系55a、55b、55cの光軸である。撮影レンズ100の光入射面は平面、光射出面となるレンズ部100a、100b、100cは球面であるので、各球心を通して光入射面100eに垂直な直線が光軸となる。

【0063】

このとき、無限遠物体の像は図13に示すようにレンズ部100a、100b、100cと同一の間隔で形成されるため、G物体像とR物体像の間隔、および、R物体像とB物体像の間隔は1.6783mmである。したがって、撮像領域の中心間隔1.68mmよりも若干狭く、この差 ΔY は0.0017mmすなわち $1.7\mu\text{m}$ である。また、最も視感度の高いG物体像を基準としてB物体像の移動を考えると、差 ΔY は2倍となり、 $3.4\mu\text{m}$ である。撮影画面の中央には人物等の近距離物体が位置し、画面の周辺に遠距離の物体が位置することが多いこと、さらに、画面の周辺では撮影レンズの収差が増大して画像性能が低下することから、最大像間隔変化が画素ピッチの2倍よりも小さければ、実用上の問題はないと言える。前述のように固体撮像素子120の画素ピッチPは $2.8\mu\text{m}$ であるので、 $\Delta Y < 2 \times P$ となり、この程度の無限遠像の色ズレは許容可能なレベルである。

【0064】

さらに、撮像系10の温度変化によっても像間隔は変動する。固体撮像素子120の線膨張係数を α_s 、撮影レンズ100の線膨張係数を α_L 、温度変化を ΔT とすると、撮像系10は結像倍率が極めて小さいために、像間隔変化量 ΔZ は撮影レンズの伸びと固体撮像素子の伸びの差として、式(4)で表すことができる。

【0065】

【数4】

$$\Delta Z = 1.68 \times (\alpha_L - \alpha_s) \times \Delta T \quad \dots\dots\dots (4)$$

ここで、 $\alpha_s = 0.26 \times 10^{-5}$ 、 $\Delta T = 20 [^\circ]$ 、さらに、撮影レンズ100を低融点ガラスで作成するとして $\alpha_L = 1.2 \times 10^{-5}$ とすると、 ΔZ は0.00032[mm]と算出される。これはG物体像とR物体像の間隔変化、および、R物体像とB物体像の間隔変化量である。

【 0 0 6 6 】

基準画像信号であるG物体像に対する変化としてB物体像を考えると、像の間隔は 1.68×2 であるため、像間隔変化量も $\Delta Z \times 2 = 0.00063 [\text{mm}]$ となる。カメラの使用温度範囲を $0 \sim 40^\circ$ とすれば、基準温度 20° からの偏差 ΔT は 20° であって、このとき、 $\Delta Z \times 2$ が画素ピッチの $1/2$ よりも小さければ、実用上問題はない。一般に、固体撮像素子120の線膨張係数 α_S は 0.26×10^{-5} 程度の小さい値をとるので、撮影レンズ100の線膨張係数 α_L を式(5)を満たすように選択する必要がある。

【 0 0 6 7 】

【数5】

$$2 \times A \times (\alpha_L - 0.26 \times 10^{-5}) \times 20 < \frac{1}{2} P \quad \dots\dots\dots (5)$$

なお、Aは基準像間隔、Pは画素ピッチである。

【 0 0 6 8 】

先程使用した撮影レンズ100の線膨張係数 $\alpha_L = 1.2 \times 10^{-5}$ は式(5)の関係を満足しているので、本カメラに好適な材料と言える。

【 0 0 6 9 】

また、物体距離や温度変化による像間隔の変動とは別に、固体撮像素子の撮像領域120a、120b、120cを相互に $1/2$ 画素ずらすことにより、少ない画素数で解像度を上げる画素ずらしという手法を用いる。 $1/2$ 画素ずらし量は仮想被写体距離2mに対して設定する。

【 0 0 7 0 】

図15に示すようにG画像信号用の撮像領域120aに対してR画素出力用の撮像領域120bとB画素出力用の撮像領域120cは水平方向および垂直方向に $1/2$ 画素ずつずらして配置されている。

【 0 0 7 1 】

この画素ずらしは、撮影レンズ100のレンズ部100bと100cをレンズ部100aに対して僅かに偏心させることで実現しても、固体撮像素子120の撮像領域120bと120cを撮像領域120aに対して僅かに偏心させることで実現してもよい。

【0072】

ベイヤー配列等の光学フィルター配列では、例えば緑色の光学フィルターを備えた画素の間には赤色の光学フィルターを備えた画素や青色の光学フィルターを備えた画素が入り込むために、折り返し歪みを抑制する光学ローパスフィルターが必要である。ところが、このようにスペクトル分布の異なる画像を撮像領域別に取り込むように構成すると、それぞれの光学フィルターを備えた画素を密に配列することができ、その結果、折り返し歪みの影響は小さく光学ローパスフィルターを必要とせずに高精細な画像を得ることができる。したがって、撮像系の小型化とコストの大幅な削減が可能である。

【0073】

次に、信号処理について説明する。

【0074】

前述のように固体撮像素子120 は、長辺方向に1800画素、短辺方向にそれぞれ800画素の合計144万の画素数を有する撮像デバイスが有効に適用されて、その前面には赤色(R)、緑色(G)、青色(B)の3原色の光学フィルターが所定の領域毎に配置されている。

【0075】

図14に表すように、固体撮像素子120 から読み出された画像信号は、それぞれ画像処理系20のA/D変換器500に供給される。A/D変換器500は、たとえば、露光した各画素の信号の振幅に応じた、たとえば10ビットのデジタル信号に変換して出力する信号変換回路であり、以降の画像信号処理はデジタル処理にて実行される。

【0076】

画像処理系20は、R,G,Bのデジタル信号から所望の形式の画像信号を得る信号処理回路を有し、R,G,Bの色信号を輝度信号Yおよび色差信号(R-Y),(B-Y)にて表わされるYC信号などに変換する。

【0077】

RGB画像処理回路210は、A/D変換器500を介して固体撮像素子120から受けた1800×800画素の画像信号を処理する信号処理回路であり、ホワイトバランス回

路、ガンマ補正回路、補間演算による高解像度化を行う補間演算回路を有する。

【 0 0 7 8 】

YC処理回路230 は、輝度信号 Y および色差信号 R-Y, B-Y を生成する信号処理回路である。高域輝度信号 YH を生成する高域輝度信号発生回路、低域輝度信号 YL を生成する低域輝度信号発生回路、および、色差信号 R-Y, B-Y を生成する色差信号発生回路で構成されている。輝度信号 Y は高域輝度信号 YH と低域輝度信号 YL を合成することによって形成される。

【 0 0 7 9 】

RGB画像処理回路210の詳細を説明する。

【 0 0 8 0 】

A/D 変換器500 を介して R, G, B 領域毎に出力された RGB 信号は、まず、RGB画像処理回路210内のホワイトバランス回路にてそれぞれ所定の白バランス調整が行なわれ、さらに、ガンマ補正回路にて所定のガンマ補正が行なわれる。

【 0 0 8 1 】

RGB画像処理回路210 内の補間演算回路は、600×800画素の4 倍の解像度を画像信号を補間処理によって生成し、固体撮像素子120からの画像信号を高精細画質の信号に変換して、後段の高域輝度信号発生回路、低域輝度信号発生回路、色差信号発生回路に供給する。

【 0 0 8 2 】

RGB各物体像の大きさは撮影レンズ100の設定によって、すでに同一になっているので、まず、公知の手法によって撮影光学系の歪曲収差を補正する演算処理を各画像信号について行う。その後の、補間処理や輝度信号処理、色差信号処理は通常のデジタルカラーカメラでの処理に準じたものとなる。補間処理は次に示すとおりである。

【 0 0 8 3 】

まず、基準画像信号である撮像領域120aからの G 画像信号を、次式 (6) ～ (9) にてそれぞれ補間演算する。

【 0 0 8 4 】

$$G_{2i2j} = G_{ij} \dots\dots\dots (6)$$

$$G_{2i}(2j+1)=G_{ij} \cdot 1/2 + G_{i(j+1)} \cdot 1/2 \quad \dots\dots\dots (7)$$

$$G_{(2i+1)2j}=G_{ij} \cdot 1/2 + G_{(i+1)j} \cdot 1/2 \quad \dots\dots\dots (8)$$

$$G_{(2i+1)(2j+1)}=G_{ij} \cdot 1/4 + G_{i(j+1)} \cdot 1/4 + G_{(i+1)j} \cdot 1/4 + G_{(i+1)(j+1)} \cdot 1/4 \quad \dots\dots\dots (9)$$

これにより、図 1 6 に示すようにそれぞれ 4 個の G 画素から 16 個の G 画素が生成されて、撮像領域 120a からの 600×800 画素の G 画像信号が 1200×1600 画素に変換される。

【 0 0 8 5 】

次に、上式 (6) ～ (9) にて求めた G 画像信号のそれぞれの位置に対応して撮像領域 120b からの R 画素出力を次式 (10) ～ (13) にて補間演算する。

【 0 0 8 6 】

$$R_{2i2j}=R_{(i-1)(j-1)} \cdot 1/4 + R_{(i-1)j} \cdot 1/4 + R_{i(j-1)} \cdot 1/4 + R_{ij} \cdot 1/4 \quad \dots\dots\dots (10)$$

$$R_{2i}(2j+1)=R_{(i-1)j} \cdot 1/2 + R_{ij} \cdot 1/2 \quad \dots\dots\dots (11)$$

$$R_{(2i+1)2j}=R_{i(j-1)} \cdot 1/2 + R_{ij} \cdot 1/2 \quad \dots\dots\dots (12)$$

$$R_{(2i+1)(2j+1)}=R_{ij} \quad \dots\dots\dots (13)$$

前述のように R 物体像の撮像領域と B 物体像の撮像領域は G 物体像の撮像領域に対して 1/2 画素だけずらした配置になっているため、式 (13) のように ij 番地の元出力を (2i+1)(2j+1) 番地に適用している。

【 0 0 8 7 】

同様に、R 画素と同様に撮像領域 120c からの B 画素を上式 (6) ～ (9) にて求めた G 画像信号のそれぞれの位置に対応して次式 (14) ～ (17) にて補間演算する。

【 0 0 8 8 】

$$B_{2i2j}=B_{(i-1)(j-1)} \cdot 1/4 + B_{(i-1)j} \cdot 1/4 + B_{i(j-1)} \cdot 1/4 + B_{ij} \cdot 1/4 \quad \dots\dots\dots (14)$$

$$B_{2i}(2j+1)=B_{(i-1)j} \cdot 1/2 + B_{ij} \cdot 1/2 \quad \dots\dots\dots (15)$$

$$B_{(2i+1)2j}=B_{i(j-1)} \cdot 1/2 + B_{ij} \cdot 1/2 \quad \dots\dots\dots (16)$$

$$B_{(2i+1)(2j+1)}=B_{ij} \quad \dots\dots\dots (17)$$

以上の処理により、撮像領域 120a、120b、120c からの各 600×800 画素の RGB 信号が高精細画質の 1200×1600 画素の RGB 信号に変換される。

【0089】

YC処理回路230内の高域輝度信号発生回路は、色成分信号の中で最も高い空間周波数成分を有する色信号から高域輝度信号YHを形成する公知の信号形成回路である。低域輝度信号発生回路は、R,G,B すべての色成分を含む信号から低域周波数の輝度信号YLを形成する公知の信号形成回路である。また、色差信号発生回路は、高精細のRGB 信号から色差信号R-Y,B-Y を演算する公知の演算回路である。

【0090】

記録再生系30は、メモリへの画像信号の出力と、液晶モニタ4への画像信号の出力とを行う処理系であり、メモリへの画像信号の書き込みおよび読み出し処理を行なう記録処理回路300 と、メモリから読み出した画像信号を再生して、モニタ出力とする再生処理回路310 とを含む。より詳細には、記録処理回路300 は、静止画像および動画像を表わすYC信号を所定の圧縮形式にて圧縮し、また、圧縮データを読み出した際に伸張する圧縮伸張回路を含む。圧縮伸張回路は、信号処理のためのフレームメモリなどを含み、このフレームメモリに画像処理系20からのYC信号をフレーム毎に蓄積して、それぞれ複数のブロック毎に読み出して圧縮符号化する。圧縮符号化は、たとえば、ブロック毎の画像信号を2次元直交変換、正規化およびハフマン符号化することにより行なわれる。

【0091】

再生処理回路310 は、輝度信号Y および色差信号R-Y,B-Y をマトリックス変換してたとえばRGB 信号に変換する回路である。再生処理回路310 によって変換された信号は液晶モニタ4に出力され、可視画像が表示再生される。

【0092】

一方、制御系40は、外部操作に応動して撮像素子10、画像処理系20、記録再生系30をそれぞれ制御する各部の制御回路を含み、リリースボタン6の押下を検出して、固体撮像素子120 の駆動、RGB画像処理回路210 の動作、記録処理回路300の圧縮処理などを制御する。具体的には、リリースボタン6の操作を検出する操作検出回路410 と、その検出信号に応動して各部を制御し、撮像の際のタイミング信号などを生成して出力するシステム制御部400 と、このシステム制御部400 の制御の下に固体撮像素子120 を駆動する駆動信号を生成する固体撮像素子の駆動

回路420 とを含む。

【0093】

次に、本実施例による撮像装置の動作を図14及び図17を用いて説明する。まず、メインスイッチ5をオンとすると、各部に電源電圧が供給されて動作可能状態となる。次に、メモリに画像信号を記録可能か否かが判定される。この際に、残り容量に応じて撮影可能記録枚数が液晶モニタ4の残り枚数表示13に表示される。その表示を見た操作者は、撮影可能であれば、被写界にカメラを向けて、リリースボタン6を押下する。

【0094】

リリースボタン6を半分だけ押下すると、露光時間の算出が行なわれる。すべての撮影準備処理が終了すると、撮影可能となり、その表示が撮影者に報じられる。これにより、リリースボタン6が終端まで押下されると、操作検出回路410はシステム制御回路400にその検出信号を送出する。その際に、あらかじめ算出された露光時間の経過をタイムカウントして、所定の露光時間が経過すると、駆動回路420にタイミング信号を供給する。これにより、駆動回路420は水平および垂直駆動信号を生成して露光された1600×800画素のそれぞれを水平および垂直方向に順次読み出す。

【0095】

読み出されたそれぞれの画素は、A/D変換器500にて所定のビット値のデジタル信号に変換されて、画像処理系20のRGB画像処理回路210に順次供給される。RGB画像処理回路210では、これらをそれぞれホワイトバランス、ガンマ補正を施した状態にて画素の解像度を4倍にする補間処理を行なって、YC処理回路230に供給する。

【0096】

YC処理回路230では、その高域輝度信号発生回路にて、RGBそれぞれの画素の高域輝度信号YHを生成し、同様に、低域輝度信号発生回路にて低域輝度信号YLをそれぞれ演算する。演算した結果の高域輝度信号YHは、ローパス・フィルタを介して加算器に出力される。同様に、低域輝度信号YLは、高域輝度信号YHが減算されてローパス・フィルタを通過して加算器に出力される。これにより、高域輝度信

号YHとその低域輝度信号との差YL-YH が加算されて輝度信号Yが得られる。同様に、色差信号発生回路では、色差信号R-Y,B-Y を求めて出力する。出力された色差信号R-Y,B-Y は、それぞれローパス・フィルタを通った成分が記録処理回路300 に供給される。

【0097】

次に、YC信号を受けた記録処理回路300 は、それぞれの輝度信号Yおよび色差信号R-Y,B-Y を所定の静止画圧縮方式にて圧縮して、順次メモリに記録する。

【0098】

メモリに記録された静止画像または動画像を表わす画像信号からそれぞれの画像を再生する場合には、再生ボタン9を押下すると操作検出回路410 にてその操作を検出して、システム制御部400 に検出信号を供給する。これにより記録処理回路300 が駆動される。駆動された記録処理回路300 は、メモリから記録内容を読み取って、液晶モニタ4に画像を表示する。操作者は、所望の画像を選択ボタンなどの押下により選択する。

(第2の実施例)

図18は撮像系の第2の実施例を示す図である。第1の実施例と同様に、撮像系790の絞り110は図3に示すような3つの円形開口110a、110b、110cを有し、この各々から撮影レンズ100の光入射面100eに入射した物体光は、撮影レンズ100の3つのレンズ部100a、100b、100cから射出して固体撮像素子120の撮像面上に3つの物体像を形成する。

【0099】

3つのレンズ部100a、100b、100cは、撮影レンズ100を光射出側から見た図5に示すように円径の球面部を持ち、この球面部には670nm以上の波長域について低い透過率を持たせた赤外線カットフィルターが、また、ハッチングをかけて示した平面部100dには遮光性膜が形成されている。すなわち、撮影光学系は撮影レンズ100と絞り110より成り、3つのレンズ部100a、100b、100cのそれぞれが結像系である。

【0100】

固体撮像素子120は図2に示した第1の実施例と同一であって、イメージサー

クル51aと51b、および、イメージサークル51bと51cには互いに重なり合う部分が生じる。

【0101】

図18において、絞り110の光入射側に配置された薄板700a、700b、700cは偏光板であって、矢印A、B、Cで示すように、偏光板700aと700cは図の上下方向に振動面を持った光を透過する偏光板、偏光板700bはこれと直交方向（図面を垂直に貫通する方向）の振動面を持った光を透過する偏光板である。

【0102】

第1の実施例とは異なって、緑色、赤色、青色を透過する光学フィルターが撮影レンズに形成されていないので、図20に示すイメージサークル701aに形成されている物体像は図18の上下方向に振動面を持った直線偏光、イメージサークル701bに形成されている物体像は図18の紙面垂直方向に振動面を持った直線偏光、イメージサークル701cに形成されている物体像は図18の上下方向に振動面を持った直線偏光によるカラー画像となる。つまり、これらは振動方向が直交した直線偏光画像である。

【0103】

一方、固体撮像素子120の3つの撮像領域120a、120b、120c上には第1の実施例と同様に光学フィルター53a、53b、53cが形成され、これらの分光透過率特性は図6に示したものと同等である。したがって、撮像領域120aは緑色光（G）に対して、撮像領域120bは赤色光（R）に対して、撮像領域120cは青色光（B）に対して感度を持つ。

【0104】

固体撮像素子120の撮像領域の前面には、偏光板702a、702b、702cが配置され、矢印D、E、Fで示すように、絞り110の前に配置した偏光板702a、702b、702cと同一に配列された透過軸を有している。

【0105】

各撮像領域の受光量は瞳と撮像領域の分光透過率の積として与えられるため、瞳と撮像領域の組み合わせは偏光板の透過軸によって選択される。つまり、絞りの開口110aを通過した物体光は主に撮像領域120aで光電変換され、絞りの開口11

0bを通過した物体光は主に撮像領域120bで光電変換され、さらに、絞りの開口110cを通過した物体光は主に撮像領域120cで光電変換される。すなわち、固体撮像素子120上に設けた光学フィルターにより、撮像領域120aはG画像を、撮像領域120bはR画像を、撮像領域120cはB画像を出力することになる。画像処理系20は、このように固体撮像素子120の複数の撮像領域が、各々、前記複数の画像の一つから得た選択的光電変換出力に基づいてカラー画像を形成する。この際、比視感度のピーク波長は555nmであるので、この波長を含むG画像を基準として信号処理を行う。

【0106】

固体撮像素子の画素ピッチを固定して考えると、固体撮像素子上に例えば2×2画素を一組としたRGBカラーフィルターを形成して画素の一つ一つに波長選択性を付与し、これによって物体像をRGBの各画像に分離する一般のデジタルカラーカメラに採用されている方式に比較して、物体像の大きさが $1/\sqrt{3}$ になり、これに伴って撮影レンズの焦点距離はおおよそ $1/\sqrt{3}$ となる。したがって、カメラの薄型化に対して極めて有利である。

【0107】

さらに、物体像のスペクトルに基づいて選択的に画像を光電変換する第1の実施例では、互いにオーバーラップする波長域が広いシアン、マゼンタ、イエローの補色光学フィルターを使用することができなかったが、このように光の振動方向に基づいて選択的に画像を光電変換するば、波長域のオーバーラップは無関係となり補色光学フィルターを使用することも可能である。補色光学フィルターを使用すると、原色フィルターに比べて固体撮像素子に到達する光量を増大させることができる。

【0108】

また、光の振動方向に基づいて画像を選択する場合には、色分解のための光学フィルターの配置に自由度がある。図19は、図18に示した実施例から光学フィルターの位置を変えた他の実施形態を表す図である。

図19に示す撮像系791では、色分解のための光学フィルターを撮影レンズ100の光入射面100eに設け、固体撮像素子720上には設けていない。

(第 3 の実施例)

図 2 1 は撮像系の第 3 の実施例を示す断面図である。撮像系 890 の絞り 110、撮影レンズ 100 は第 1 の実施例と同一である。

【 0 1 0 9 】

また、図 2 2 は固体撮像素子 820 の正面図で、固体撮像素子 820 上には図 2 に示した第 1 の実施例と同様にイメージサークル 51a, 51b, 51c が形成され、イメージサークル 51a と 51b、および、イメージサークル 51b と 51c には互いに重なり合う部分が生じる。

【 0 1 1 0 】

第 1 の実施例とは異なって、撮像領域 820a, 820b, 820c の上にはマイクロレンズ 821 が各画素の受光部（例えば 822a, 822b）毎に形成され、その代わり、緑色、赤色、青色を透過する光学フィルターが固体撮像素子 820 には形成されていない。なお、マイクロレンズの説明のために、撮像領域間の画素ずらしを省略して示した。

【 0 1 1 1 】

マイクロレンズ 821 は固体撮像素子 820 の受光部に対して偏心した配置をとり、その偏心量は各撮像領域 820a, 820b, 820c の中央でゼロ、周辺に行くほど大きくなるように設定されている。また、偏心方向は各撮像領域 820a, 820b, 820c の中央の点 Pa, Pb, Pc と各受光部を結ぶ線分の方である。

【 0 1 1 2 】

図 2 3 はこのマイクロレンズの作用を説明するための図で、撮像領域 820a と撮像領域 820b が接する位置にある受光部 822a, 822b を拡大して示した断面図である。受光部 822a に対してマイクロレンズ 821a は図の上方に偏心し、他方、受光部 822b に対してマイクロレンズ 821b は図の下方に偏心している。この結果、受光部 822a に入射する光束は、823a としてハッチングで示した領域に、受光部 822b に入射する光束は、823b としてハッチングで示した領域に限定される。

【 0 1 1 3 】

光束の領域 823a と 823b の傾斜方向は反対向きで、それぞれはレンズ部 100a と 100b に向かっている。したがって、マイクロレンズの偏心量を適切に選べば、各撮

像領域へは特定の瞳を射出した光束だけが入射することになる。つまり、絞りの開口110aを通過した物体光は主に撮像領域820aで光電変換され、絞りの開口110bを通過した物体光は主に撮像領域820bで光電変換され、さらに、絞りの開口110cを通過した物体光は主に撮像領域820cで光電変換されるように偏心量を設定することができる。固体撮像素子120上には光学フィルターを設けてあるので、すなわち、撮像領域820aはG画像を、撮像領域820bはR画像を、撮像領域820cはB画像を出力することになる。

【0114】

固体撮像素子の画素ピッチを固定して考えると、固体撮像素子上に例えば 2×2 画素を一組としたRGBカラーフィルターを形成して画素の一つ一つに波長選択性を付与し、これによって物体像をRGBの各画像に分離する一般のデジタルカラーカメラに採用されている方式と比較して、物体像の大きさが $1/\sqrt{3}$ になり、これに伴って撮影レンズの焦点距離はおおよそ $1/\sqrt{3}$ となる。したがって、カメラの薄型化に対して極めて有利である。

【0115】

さらに、物体像のスペクトルに基づいて選択的に画像を光電変換する第1の実施例では、互いにオーバーラップする波長域が広いシアン、マゼンタ、イエローの補色光学フィルターを使用することができなかったが、このようにマイクロレンズの偏心によって選択的に画像を光電変換すれば、波長域のオーバーラップは無関係となり補色光学フィルターを使用することも可能である。補色光学フィルターを使用すると、原色フィルターに比べて固体撮像素子に到達する光量を増大させることができる。

【0116】

また、このようにマイクロレンズの偏心によって画像を選択する場合には、光学フィルターを撮影レンズ100の光入射面100dに設ける代わりに固体撮像素子820上に設けてもよい。光学フィルターの配置に関わらず、第1の実施例の光学フィルターを2重に通す撮影光路や、第2の実施例の偏光板を用いる撮影光路に比べ、光量的に極めて有利である。さらには、撮影レンズ100の光入射面100dと固体撮像素子820上の両方に設けて、画像のクロストークをさらに低減することも可

能である。

【0 1 1 7】

【発明の効果】

以上説明したように、本発明によれば、複数の撮像領域と、一つの撮像領域と、前記一つの撮像領域に隣接する他の撮像領域に跨るように被写体の像を投影する結像手段と、前記結像手段から入力した前記被写体からの像信号が前記他の撮像領域で光電変換されることを抑制する抑制手段とを有するように構成することで、次の効果が得られた。

(1) 物体像分離壁を必要とせず、小型の撮像素子を使用した薄型デジタルカラーカメラを提供することができた。

(2) 波長域毎の物体像を形成することによって、同種の光学フィルターを備えた画素を密に配列することが可能となり、折り返し歪みを除去するための光学ローパスフィルターを必要としない撮像系を実現することができた。

【0 1 1 8】

さらに、前記抑制手段としては、前記複数の結像手段にそれぞれ配された波長帯域の異なる複数の第 1 の色フィルターと、前記撮像領域にそれぞれ配された、該第 1 の色フィルターと同じ波長帯域の複数の第 2 の色フィルターとからなるものを用いることで、次の効果が得られた。

(3) 色純度の高い画像を得るに好適な構成で、物体像分離壁を必要としない小型の撮像素子を使用した薄型デジタルカラーカメラを提供することができた。

【0 1 1 9】

加えて、前記抑制手段として、前記複数の結像手段の各々に対応して配された、隣接する結像手段について偏光方向が異なる複数の第 1 の偏光手段と、前記撮像領域に対応して配された、該第 1 の偏光手段と偏光方向が同じ複数の第 2 の偏光手段とからなるものを用いることで、次の効果が得られた。

(4) 色分解のための光学フィルターを制約しない構成で、物体像分離壁を必要としない小型の撮像素子を使用した薄型デジタルカラーカメラを提供することができた。

(5) 補色光学フィルターの使用を可能とし、光量的に有利な撮像系を実現する

ことができた。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

撮像系の断面図である。

【図 2】

固体撮像素子の正面図である。

【図 3】

絞りの平面図である。

【図 4】

光学フィルターの形成範囲を表す図である。

【図 5】

撮影レンズを光射出側から見た図である。

【図 6】

光学フィルターの分光透過率特性を表す図である。

【図 7】

色純度補正フィルタの分光透過率特性を表す図である。

【図 8】

フォトリソミックガラスの分光透過率特性を表す図である。

【図 9】

透過率分布型フィルターの透過率分布を表す図である。

【図 1 0】

撮影レンズのOTF特性を表す図である。

【図 1 1】

点像の輝度分布を表す図である。

【図 1 2】

レンズ部の間隔設定を説明するための図である。

【図 1 3】

無限遠物体の像の位置を説明するための図である。

【図 1 4】

信号処理系のブロック図である。

【図 1 5】

G 画像用の撮像領域に対する R 画素用の撮像領域と B 画素用の撮像領域の位置関係を示す図である。

【図 1 6】

補間処理の説明図である。

【図 1 7】

デジタルカラーカメラの全体構成を表す図である。

【図 1 8】

実施例 2 における撮像系の断面図である。

【図 1 9】

実施例 2 における他の形態による撮像系の断面図である。

【図 2 0】

実施例 2 における固体撮像素子の正面図である。

【図 2 1】

実施例 3 における撮像系の断面図である。

【図 2 2】

実施例 3 における固体撮像素子の正面図である。

【図 2 3】

マイクロレンズの作用説明図である。

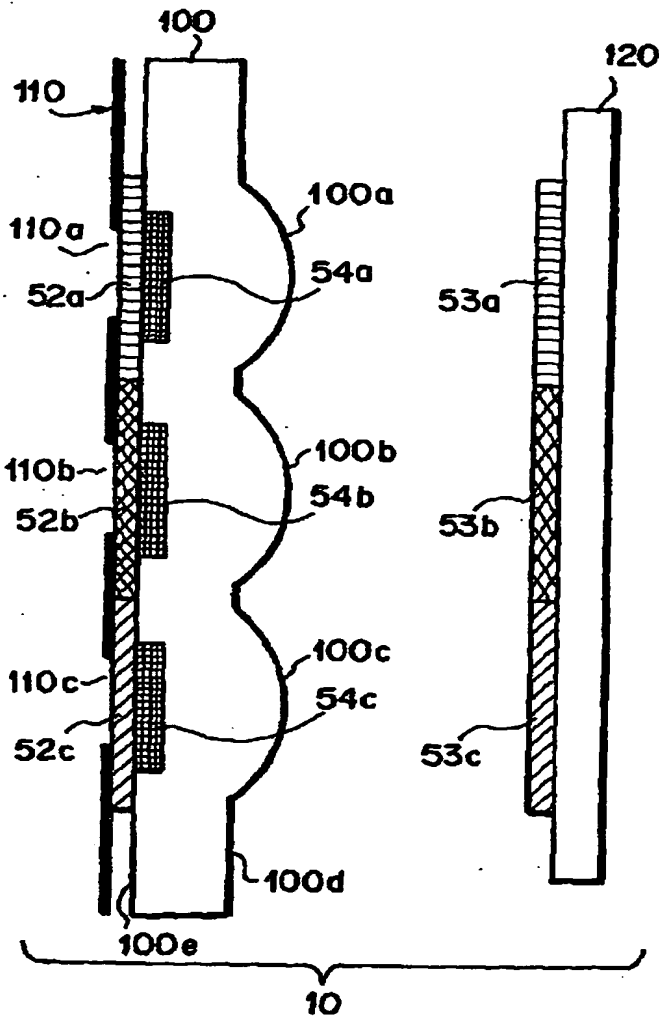
【符号の説明】

- 1 カメラ本体
- 2 照明光取り込み窓
- 3 ファインダー前枠
- 4 カラー液晶モニタ
- 5 メインスイッチ
- 6 レリーズ釦
- 7、8、9 スイッチ
- 10 撮像系

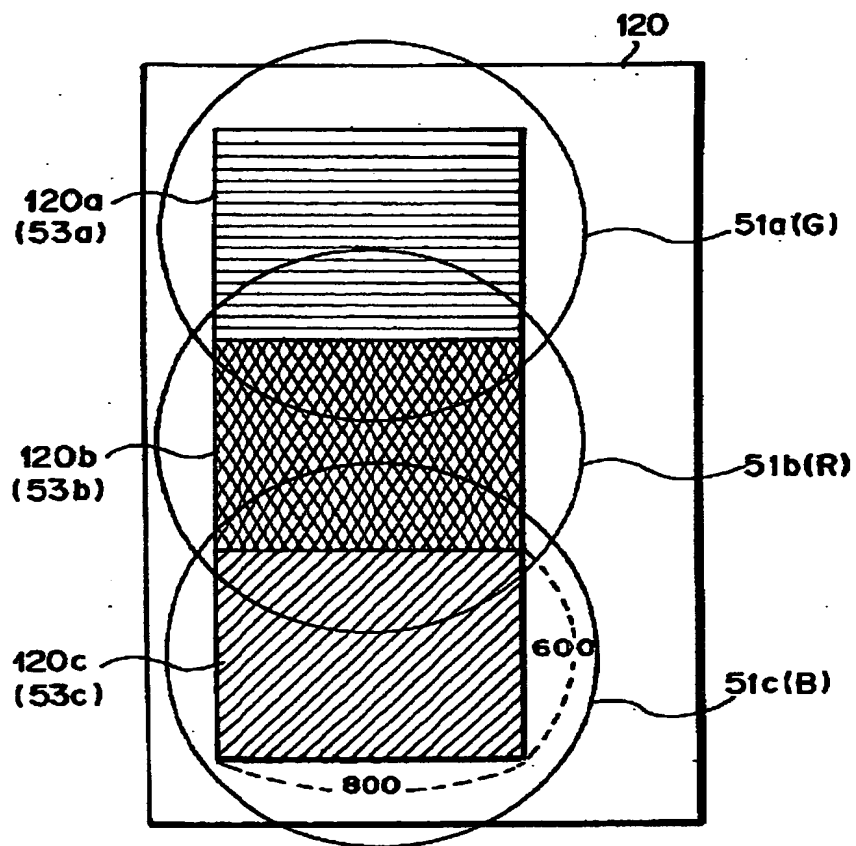
- 11 ファインダー接眼窓
- 12 プリズム
- 13 撮影可能な残り枚数の表示
- 14 接続端子
- 51a、51b、51c イメージサークル
- 52a、52b、52c 撮影レンズ上に形成された光学フィルター
- 53a、53b、53c 固体撮像素子上に形成された光学フィルター
- 54a、54b、54c 透過率分布型フィルター
- 100 撮影レンズ
- 100a、100b、100c 撮影レンズのレンズ部
- 110 絞り
- 120 固体撮像素子

【書類名】 図面

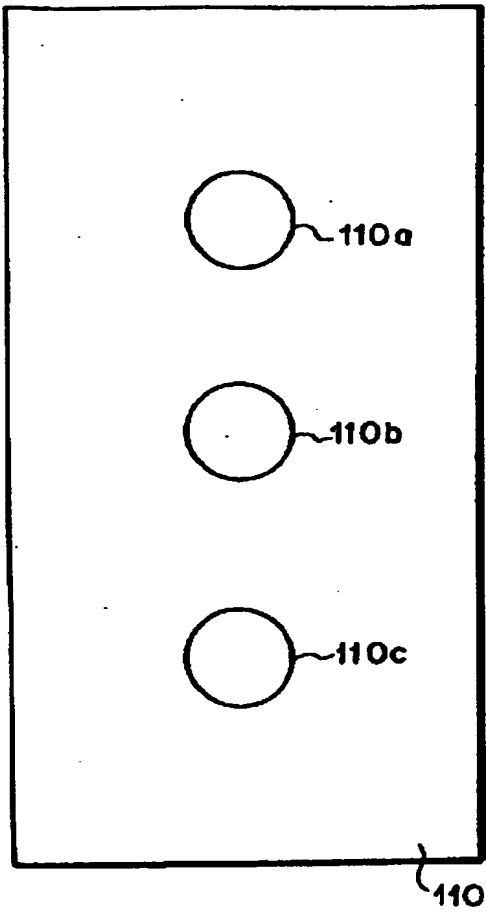
【図 1】



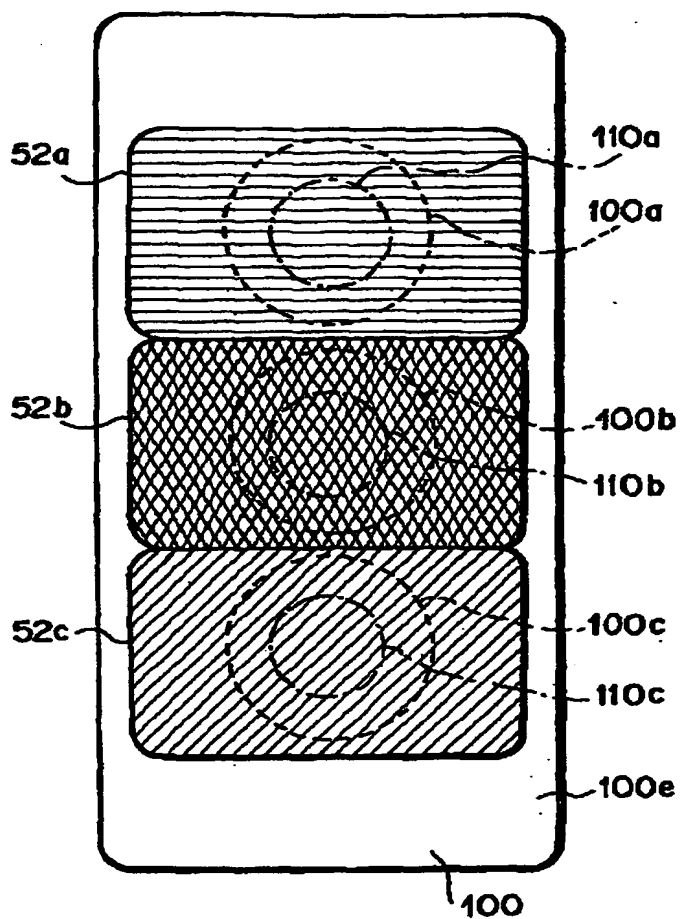
【図 2】



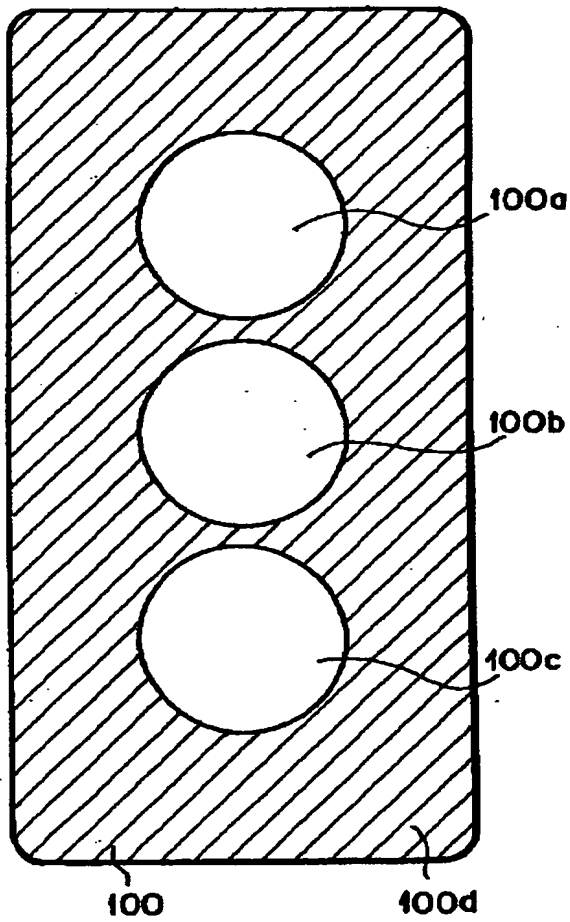
【図 3】



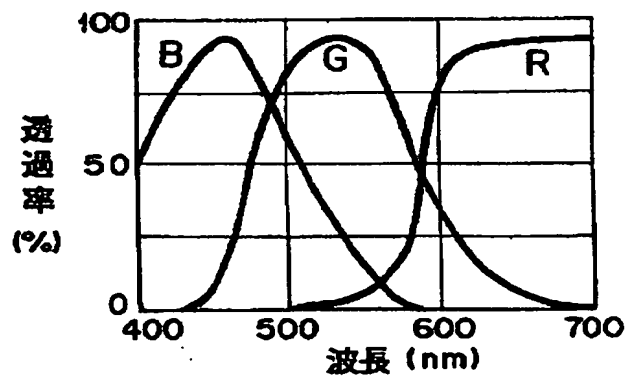
【図4】



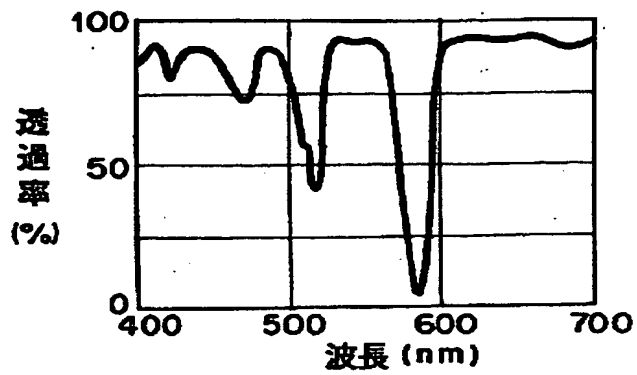
【図 5】



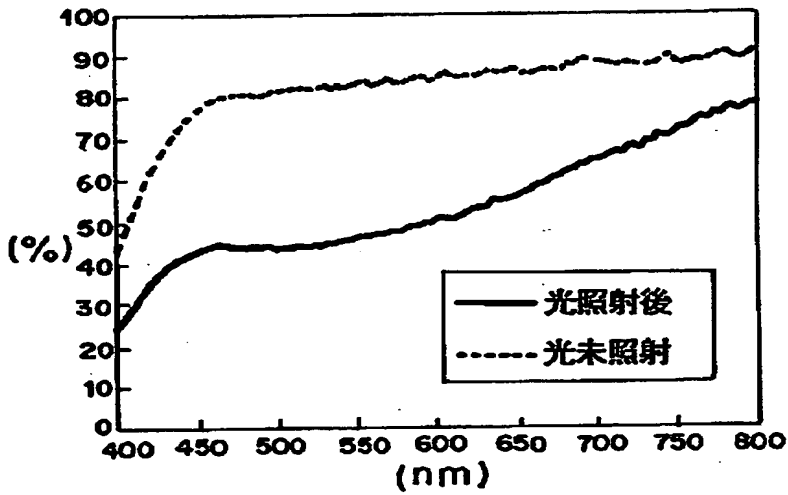
【図 6】



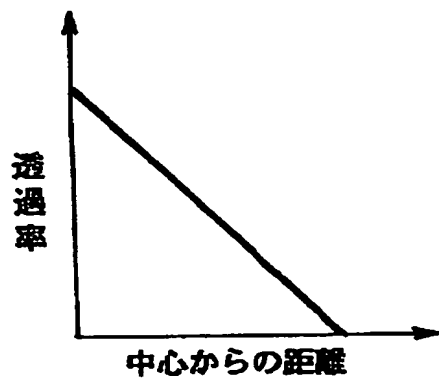
【図 7】



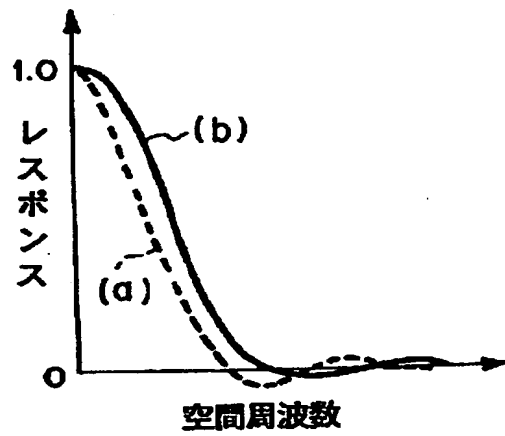
【図 8】



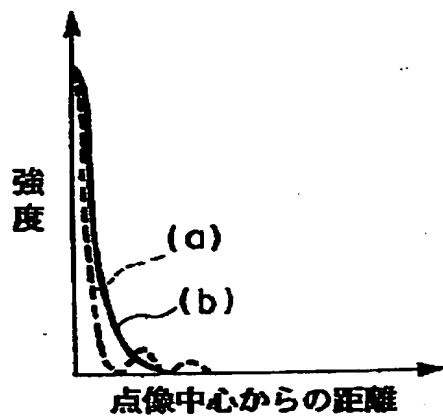
【図 9】



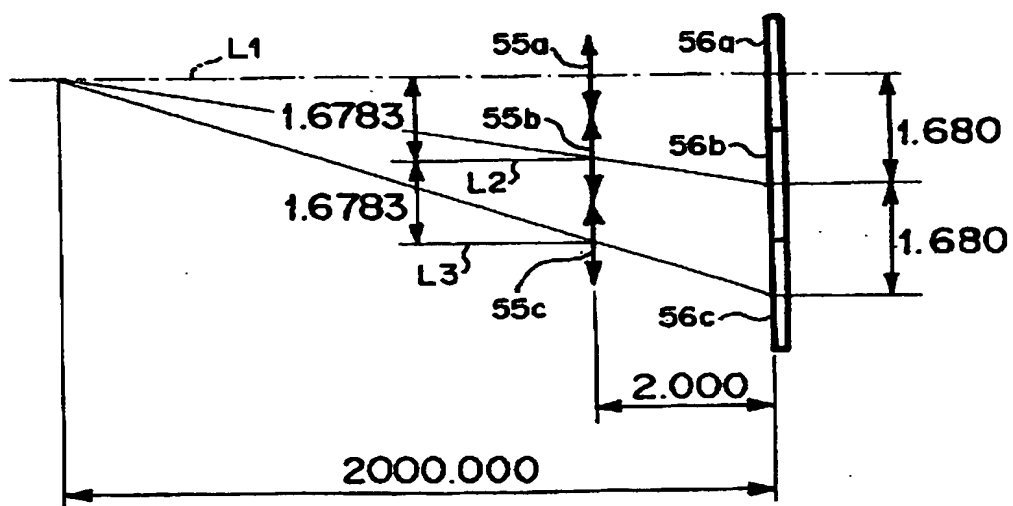
【図 10】



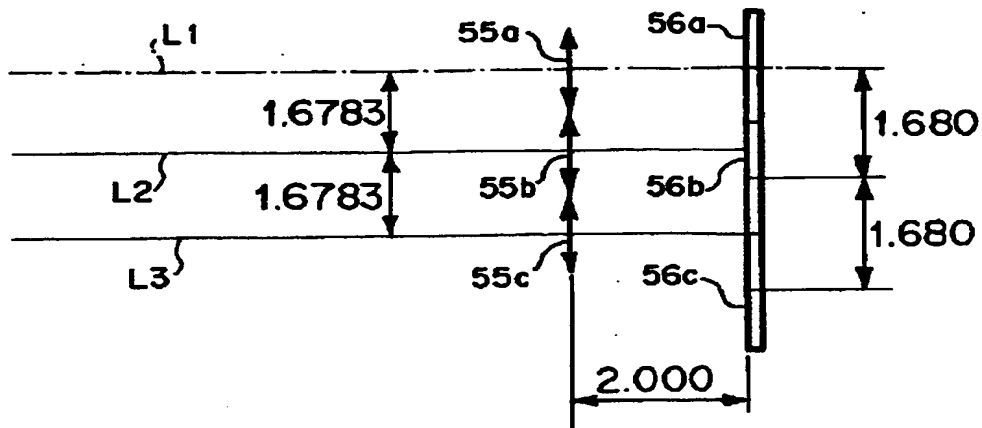
【図 11】



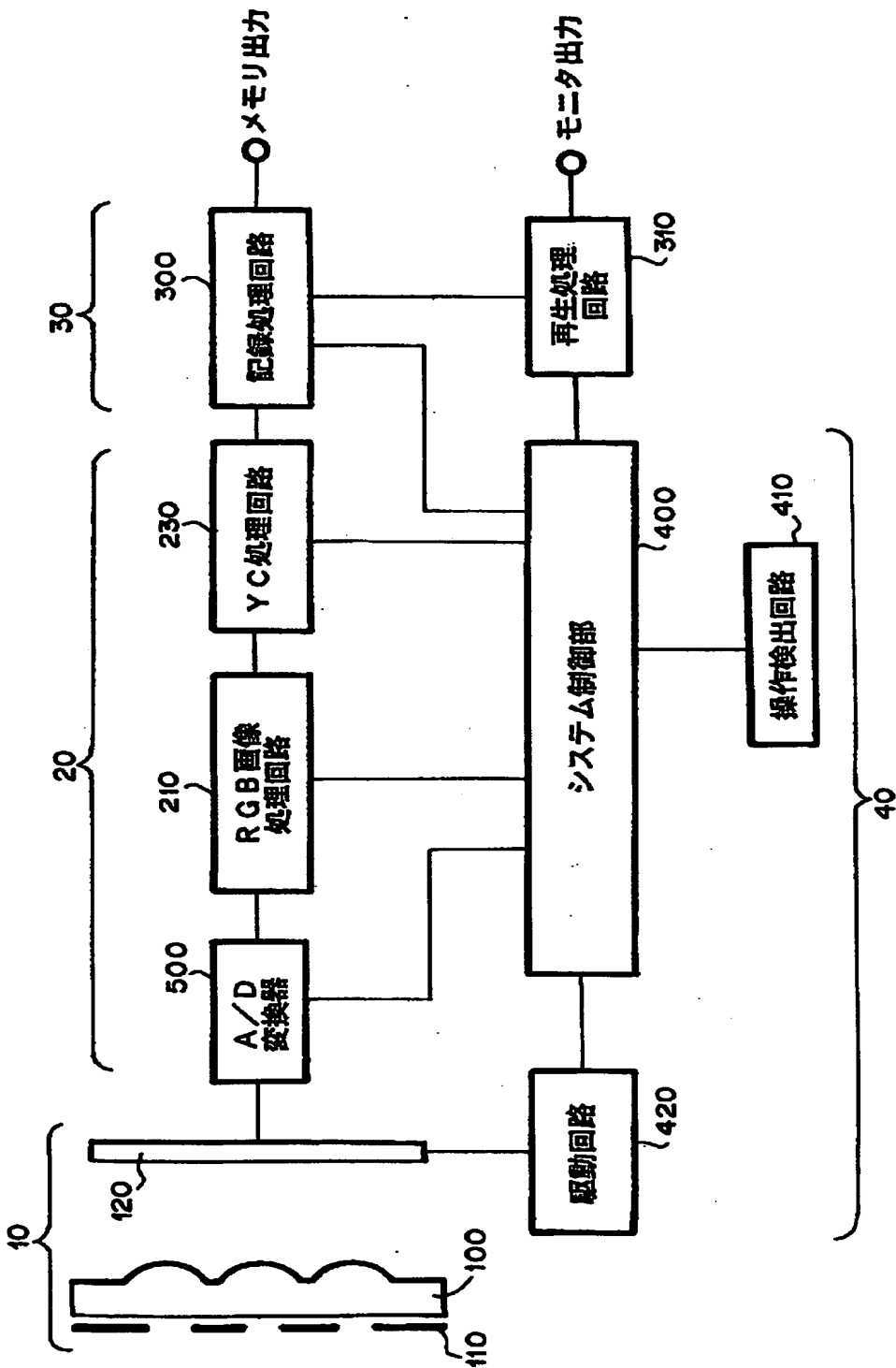
【図 12】



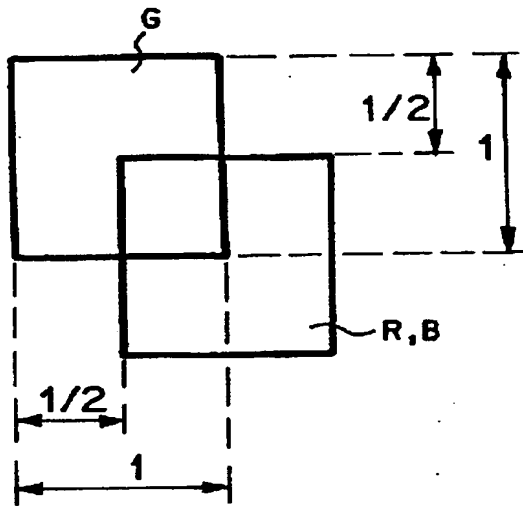
【図 13】



【図 14】



【図 1 5】



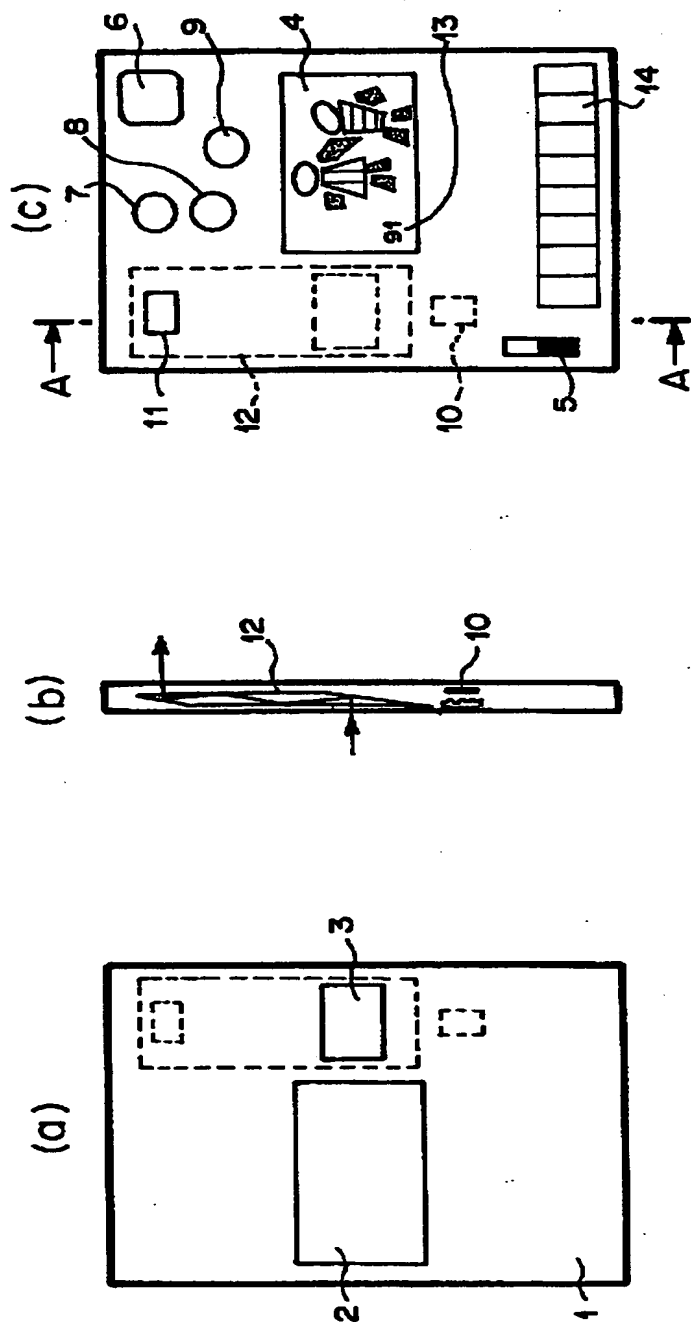
【図 1 6】

G_{00}	G_{01}
G_{10}	G_{11}

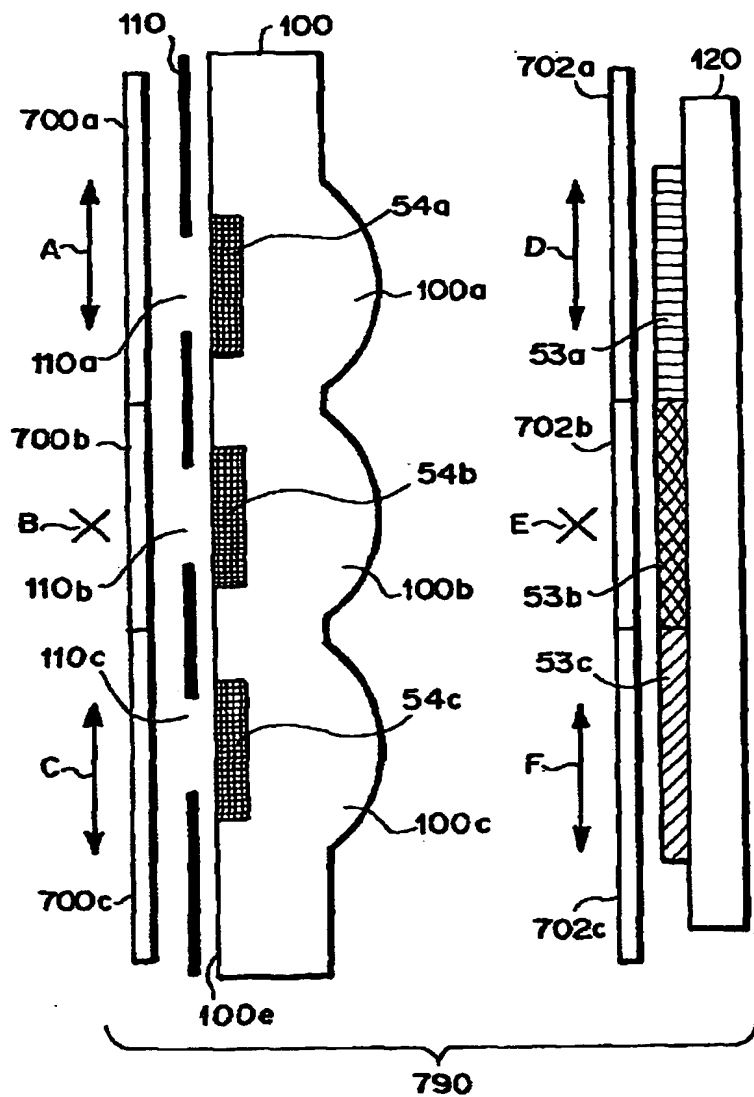


G_{00}	G_{01}	G_{02}	G_{03}
G_{10}	G_{11}	G_{12}	G_{13}
G_{20}	G_{21}	G_{22}	G_{23}
G_{30}	G_{31}	G_{32}	G_{33}

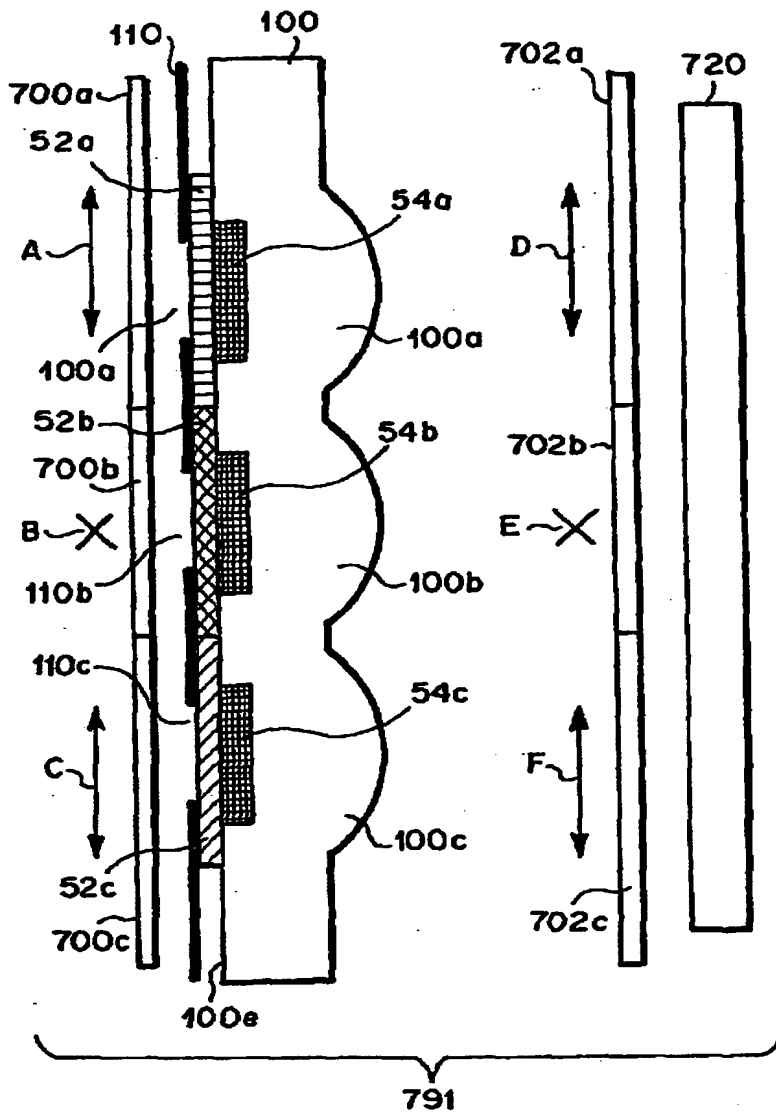
【図 17】



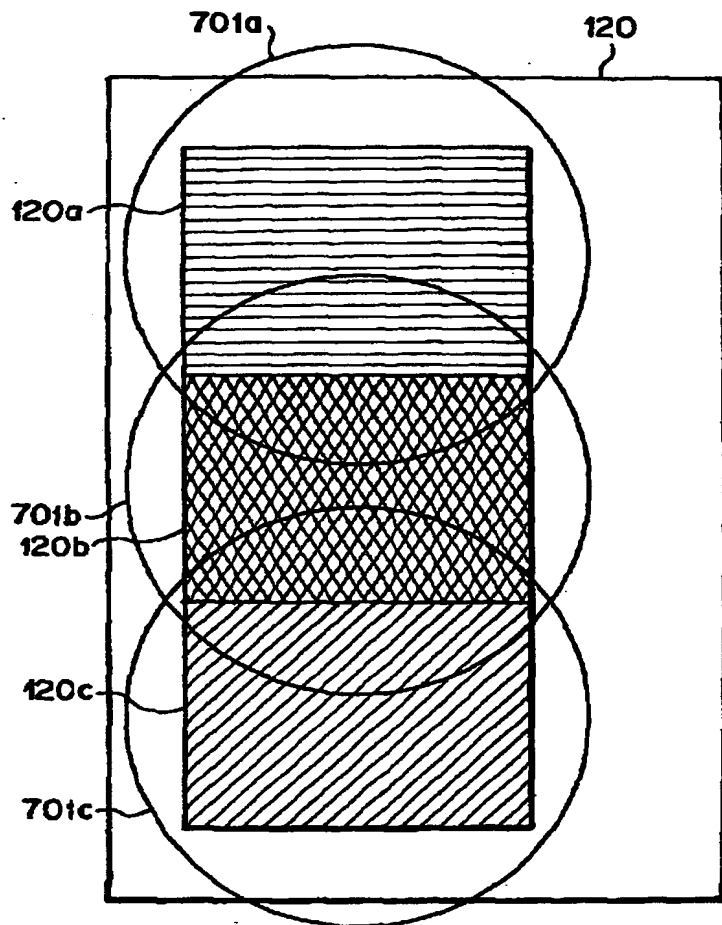
【図 18】



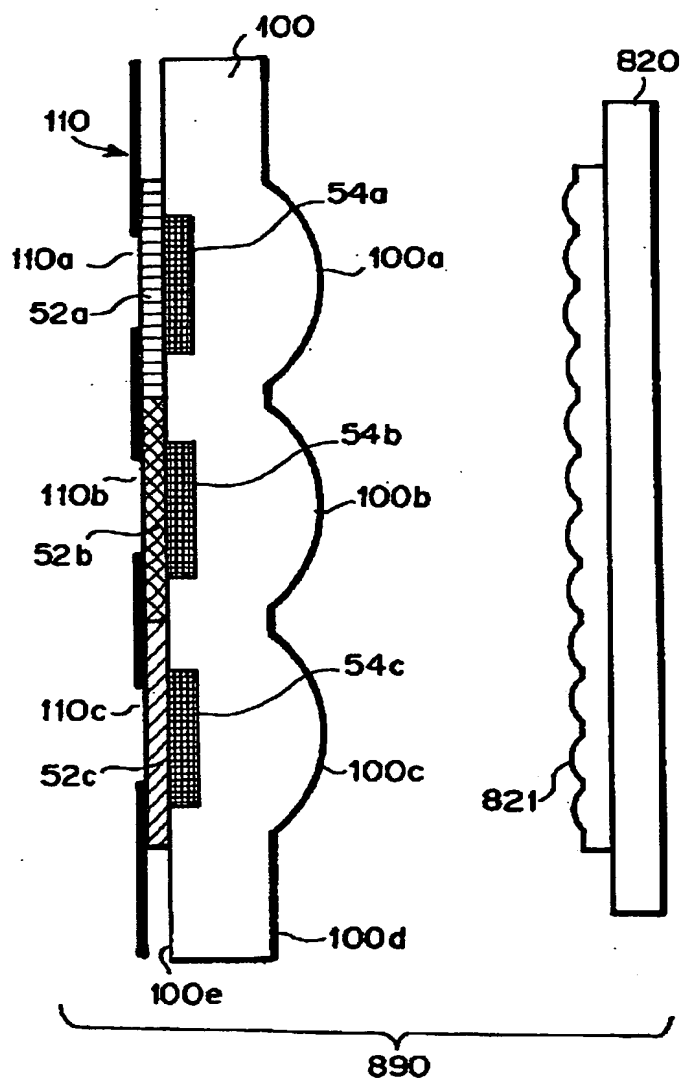
【図 19】



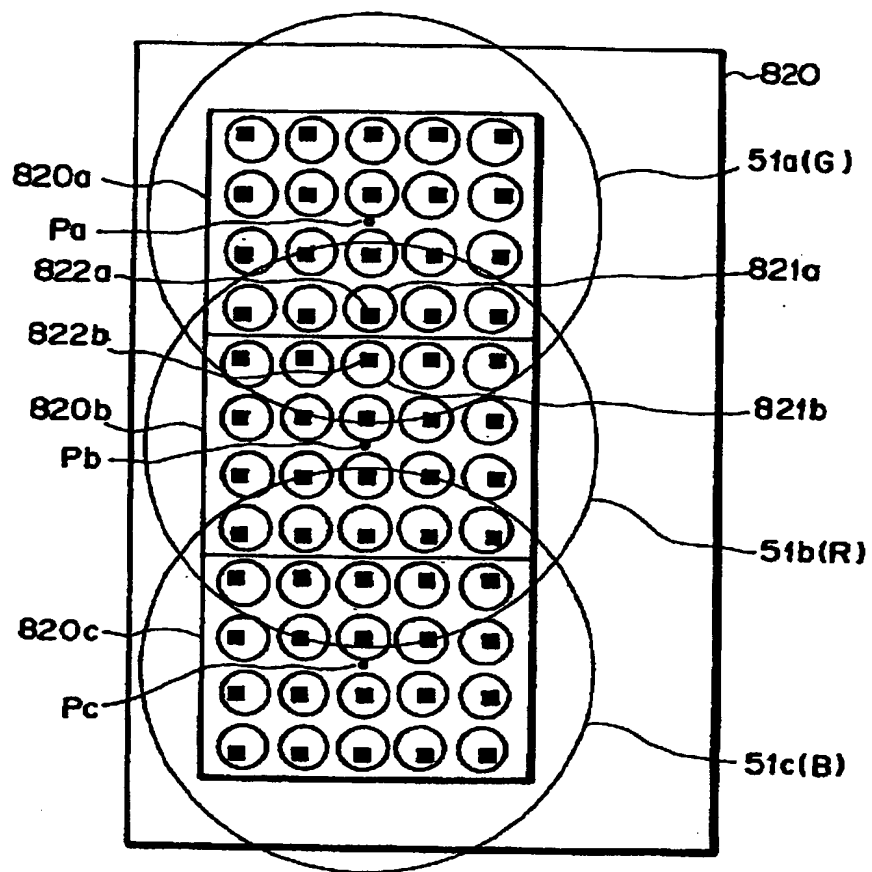
【図 2 0】



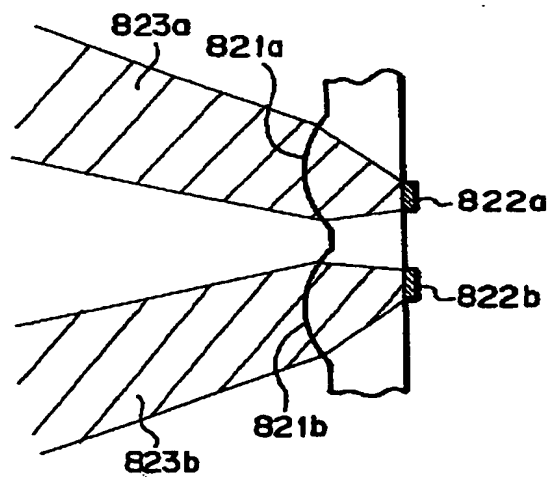
【図 2 1】



【図 22】



【図 23】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 物体像分離壁を必要とせず、小型の撮像素子を使用可能とする。

【解決手段】 複数の撮像領域 1 2 0 a ~ 1 2 0 c と、一つの撮像領域と、この一つの撮像領域に隣接する他の撮像領域に跨るように被写体の像を投影する結像手段 1 0 0 a ~ 1 0 0 c と、結像手段から入力した被写体からの像信号が他の撮像領域で光電変換されることを抑制する抑制手段 5 2 a ~ 5 2 c, 5 3 a ~ 5 3 c とを有する。

【選択図】 図 1

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000001007]

1. 変更年月日 1990年 8月30日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都大田区下丸子3丁目30番2号
氏 名 キヤノン株式会社